

JAL愛媛原告を支える会



ニュース



発行：JAL不当解雇とたたかう愛媛原告を支える会
連絡先：愛媛自治労連会館3F愛媛労連内
松山市三番町8-10-2 Tel 089-945-4526

庭の沈丁花も、待ちわびてほころび始めた。
解雇され、地元へ戻るとほぼ同時に起きた福島原発事故。現在の人間の英知では制御できない放射能汚染の恐怖は愛媛でも既に闘いが始められていた伊方原発運転差止訴訟の一員となる



愛媛では「伊豫豆比古命神社」(いよびこのみこと・通称／椿神社)で毎年旧暦の正月八日に行われる「椿まつり」が伊予路に春を呼ぶ。「愛媛」はここに祀られている女神「愛比売命」(えひめのみこと)から名付けられた。

あきらめず闘いぬこう！

松山市在住 林 恵美

私も

応援します

敗けてたまるか



伊予郡砥部町在住 二宮治夫

“JALの不当解雇に敗けてたまるか” その一念で7年間頑張っている原告の仲間の姿には胸をうたれます。

寒風の中でのみかんもぎのアルバイト。時には添乗員として、時にはコンビニの店員として……。どんな思いで働いているのか。彼女らは、あの空に戻りたいのだ！！

JALは追い詰められている

不当解雇撤回の声は日に日に全国に広がっています。「JALに東京オリンピックを担当する資格があるのか……」頑ななJALの労務経営に批判が強まっています。いよいよ、私たち支援共闘の出番の時です。

「役者の息子の猿芝居」ある業界誌2月号の特集で植木義晴社長をこう取り上げていました。うち続く役員解任劇、社内と社外向けの顔を演じ分け、氷のように頑なな労務手法に鋭い目が向けられています。だからこそ苦しまぎれの策謀を弄するのでしょうか、それは弱音の表れなのです。

一致団結と包囲網の拡大を

支援の声を一層拡げて、一糸乱れず堂々と解決の運動を進めましょう。

- 1人でも多くの会員を！
- 1円でも多くのカンパを！
- 1枚でも多くの要請はがきを！

事を躊躇なく決断させた。不当Mさんは原発訴訟の中心で活動、解雇撤回原告団と二足のわらじされているお一人。30歳代の頃、を履くことに何の矛盾もなかつた。毎週金曜日に県庁前で行われる抗議行動にできうる限り参加もする。そのMさんが争議を加するようになった。解雇争議ながら貪り読んだという当時のへの理解も訴え、支援してくれ本を沢山下さった。ドキュメンターの仲間が増えた。毎回ご夫婦で参加されているタリーを中心に全12冊。(裏面に続く)

日本航空の不当解雇撤回をめざす
国民共闘会議第8回総会

”職場復帰”

早期解決迫る方針確認

日本航空の不当解雇撤回をめざす国民共闘会議は2月21日、東京都内で第8回総会を開催し、被解雇者の職場復帰などを求める統一要求にもとづき早期解決を迫る方針を確認しました。

当面の重点行動

- 3月 「私の代で解決したい」と述べた植木義晴社長が3月末で交代すること、ILOより第4次勧告が予測される状況を踏まえ、3月26日に日航本社前包囲大行動を配置し解決の決断を迫る。植木社長あて要請葉書に取り組む。
- 5月 春闘結果・ILO勧告の分析を踏まえ、全国各地から日航に解決の決断を迫る全国統一行動を展開。
- 6月 当該労組の夏季闘争状況もにらみつつ、株主総会に対応した行動等を検討する。



国民共闘会議第8回総会（2018年2月21日）

有名な沖電気の大量指名解雇事件。今ではイラクなどの戦場フォトジャーナリストとして著名な森住卓さんと藤田庄市さんが撮影した勝利までの8年間。貴重な写真は凛として闘う姿と明るく生き生きとした人間味溢れる労働者の姿がまぶしい。涙やうなだれている姿は不思議とない。本編では、一方的で理不尽な会社の仕打ちと闘う仲間の無念や怒りに同調する。ラストは闘ってこそ！の喜びが臨場感を持って迫ってくる。藤田氏は

「彼らは人間として大切な物を失うまいとしている。その人間の誇りを感じながら撮っていた」、森住氏は「人間らしく生きるとは何か。自分の生き方も試されていく」と示唆に富んだ言葉をあとがきで贈っている。日立や三菱など大資本との不当解雇撤回闘争について書かれたものもある。とうに赤茶けた本の全てにびっしりとな線が引かれ、読むのも困難なほど書き込みがしてある。当時のMさんの闘いに対する必死な思いがリアルタイムで伝わってくる。「ドキュメント日本航空」にも再び巡り会えた。日航労務の卑劣な組合潰しと闘い続けた先達の歴史の上に今自分がある必然に改めて誇りと確信を持つ。私達の弁護団長である上條弁護士の共著を執られた「労働裁判」に闘い抜こう！

は、労働争議の教訓とともに日本の司法の本質を教えてくれた。戦前の体質をそのまま引き継いだ裁判所は、政財界の利益にかなう解決を法と正義の名によつて正当化する機関だと。「相手の弱点に全力をあげて攻撃を集中することに成功したと勝手に勝利の曙光が見えてくる」松川事件を闘った上田弁護士の言葉は、JAL争議団への言葉として生きる。「相手の弱点は始

めから与えられているものではない。見つけ出し把み出すものとして生きる。」（同弁護士）

Mさんの闘いから40年が過ぎてもこの国の働く者の権利はほとんど前進していないように見える。しかし、諦めは不要。これ以上労働者を奴隷化させないためにあちこちで新しい闘いが始まっている。春を感じてほころび始めた小さな花たちはきつと大輪の花に違いない。勝利までも

